



## ネットワークと図書館

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福永, 邦雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10957">http://hdl.handle.net/10466/10957</a>

## ネットワークと図書館

総合情報センター

情報システム部長 福永邦雄

古来、新しい技術の誕生が人間の生活様式を左右してきた例は多い。人々の生活に関連が深い「情報」の世界においても新しい技術は生活様式を大きく変えてきた。古くは大量印刷を可能にした15世紀の「印刷技術」、また今日のラジオ、テレビなどに代表される19世紀半ばから始まった「電気通信技術」、さらには最近ではコンピュータと通信技術を融合した「ネットワーク技術」などがある。インターネットに代表されるネットワーク技術は、これまで人間が情報に接してきた形態を大きく変えてきており、新たなネットワーク文化と呼ばれる生活行動様式を生み出している。これを大学において考えると、研究の進め方、教育などに大きく影響を及ぼし、知識・情報が中心的な役割を演じる教育・研究に大きな見直しを迫っている。

ところで近年のネットワーク技術を考えると、この技術は全世界のコンピュータをあたかも一つのコンピュータとして動作しているように見せる機能を持っている。もともとコンピュータはディスプレイとかマウスなど人間とのインタフェース部、メモリとかハードディスクなどの記憶部、さらには演算部とか制御部などから構成されており、これが一つの筐体に収まっている。これらの間を結びつけるのがバスと呼ばれる高速でデータを転送できる線路である。初期の頃のバスはせいぜい筐体の長さ程度の短い距離の高速線路を前提にしていたが、これを一つの建物、また都市間さらには外国といったおおよそ人間の活動範囲の距離と同程度まで延ばすことができれば、一つのコンピュータをバラバラにして各部分を遠く離れた場所に配置することができ、見かけ上はあたかも一つのコンピュータとして取り扱うことができる。もちろん長距離の高速線路を用意することは難しい問題であったが、光ファイバーの登場によって解決を見た。

この結果、コンピュータさえあれば個人のコンピュータ上の情報から大きな図書館とか博物館が有する膨大な情報、また報道機関などが有する時事情報まで分け隔てなく利用できる大図書館時代が到来した。今日、大学生が情報を得ようとするとき、90パーセント以上はまずインターネットを利用して調べていると報告されている。もちろん、最終的に必要とする情報をすべてウェブページから得ているわけではないが、大図書館時代を彷彿とさせる数字である。このインターネットの情報検索は便利な反面、本当に必要とする情報を見つけるのは難しく3分の一程度の人しか欲しい情報に到達できないとか、得られた情報を整理して必要な情報の形にできる利用者の割合が約3分の一であるとの報告もなされている。これらのデータはネットワーク上に溢れている情報から必要な情報を必要な形で手に入れることの難しさを示している。

コンピュータとかネットワークの登場は情報を表すメディア、つまり情報の表現形態について改めて考えさせられる。コンピュータの登場によって文字中心の表現形態から、音声、図形、画像さらには動画像まで容易に扱うことができるようになった。豊富な情報量で視聴覚に訴える最近のマルチメディアは情報を伝えることの優位性を誇っているが、一方では従来の文字中心の書籍の特徴も浮き彫りにしてきた。書籍は情報の一覧性と可搬性に優れているだけでなく、文字を基本とした情報表現は各時点で得られる情報量が少ないがそれだけに著作者の意図を表すための表現の視点、個々の表現の順序、さらには簡潔な表現などにおいてよく吟味された情報伝達方法であることが指摘されており、重要な情報提供手段であることに変わりはない。

図書館とかネットワーク環境について研究者、あるいは学生に尋ねると一人一人は必ず理想の図書館像なり理想のネットワーク環境のイメージを思い描いているのがよくわかる。それだけ各自が強く思いを寄せる施設なり環境なのであろう。図書館なり情報センターのあり方を考えさせられる技術の進歩である。